

Title	青年期の孤独感：質問紙とTAT物語から見た内的世界の様相
Author(s)	原田(慶澤), 華
Citation	京都大学大学院教育学研究科紀要 (1999), 45: 393-405
Issue Date	1999-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/57318">http://hdl.handle.net/2433/57318</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 青年期の孤独感

— 質問紙とTAT物語から見た内的世界の様相 —

原田 (慶澤) 華

Loneliness in Adolescence  
— Investigation of The States of Internal Worlds  
with Questionnaires and TAT Stories —

HARADA (YOSHIZAWA) Hana

## 1. 問 題

### 1. 青年期の発達課題と孤独感

青年期は孤独感を頻繁にまた強く感じる時期であると言われる。このことは、青年期の発達課題が、心理的に“独り”になって取り組む過程を経て達成されるものであることと関わりが深いのではないだろうか。

青年期の発達課題とは、Freud, A.によれば、それまで一体感を抱きあっていた親という重要な愛情・依存の対象喪失に伴う“喪の仕事 (Mourning work)” (小此木, 1979) である。小此木 (前出) はこの“喪の仕事”に関して、“この心理過程の中で、青年たちは、親に代わる新しい愛情・依存の対象を、同世代の同性及び集団に、やがては異性に見出してゆく”と述べ、この見地から、青年期の孤独感を二つの流れ (感情) の微妙な交錯として捉えている。その一つは、“親からの分離不安、親との隔たりが起こったことへの寂しさ、親との訣別に伴う悲哀、親との一体感が失われた空虚感”といった親からの分離体験に伴う感情であり、もう一つは、“親に代わる同性ないし異性対象及び集団との間で得られる一体感、親密感、連帯感の共有への渴望とその挫折”に伴う感情である。

また、青年期の発達課題とは、Erikson (1959) によれば、“子ども時代の同一化 (複数) を、一つの新しい同一化 (a new kind of identification) に従属させる”という“自我同一性 (ego identity)”の問題である。彼 (Erikson, 1950) は、思春期や青年期においては、“幼児期の発達に匹敵する身体成長の早さのため”及び“性器の成熟が新たに加わったため”、“以前には信頼されていた斉一性と連続性”が問題となり、“連続性と斉一性の新しい観念の追求”が必要になると述べ、さらに、“自我同一性の観念は、過去において準備された内的な斉一性と連続性とは、他人に対する自分の存在の意味——「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味——の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積重ねである”と説明している。

この Erikson の同一性 (identity) という用語は広義にも狭義にも解釈されるものであるが、河合 (1985) は、「自分が自分であること」をどれほど充実感や明確さをもって示し得るかということであると述べ、この「自分が自分であることの証明」は、「他者に対してするだけではなく、自分自身あるいは自分の内界との関連においてなすべき」ものであることを指摘している。自我同一性とは、「新しく形成されてきた自己内部に目を向け」、「自己のあり方を模索する」(加藤, 1987) 過程を経なければ達成されないものである。

さらに、青年期の発達課題として「自我の発見」をあげた Spranger は、「固有の存在としての自我の発見」は、「主観をこの世の他のすべてのもの、事物および人間から常に島のように離れた一つの独自の世界として発見することであり、大きな孤独の体験を伴うものである」(加藤, 1987) と述べている。このような自分の世界を発見した青年は、「家族や友人に囲まれているが孤独を感じ、自分の内面を真に理解してくれるものはいないと考えたりする」(加藤, 前出) ようになる。河合 (1987) は、どれほど恵まれた環境にあっても疎外感や孤独感を体験するのは、「人間存在に必然的にそなわっているもの」であり、「特に子どもにとって、その自我が以前よりは意識され、自立へと向かうとき、それは一応は他と異なる存在として意識されねばならぬので、周囲の人がどんなにいい人であっても、言い知れぬ疎外感や孤独感に襲われるのである」と述べている。

以上のように見てみると、青年期の発達課題はいずれも、心理的に「独り」になるということと関係していると言えるであろう。また、それ故青年期の孤独感は、青年期の発達課題と深く関わりを持つ問題であると言えるであろう。

## 2. 対人的な孤独感と実存的な孤独感

孤独感の分類は研究者によって様々であるが、一般に、「個人の社会的相互作用の願望レベルと達成レベルの不一致から生じる不快な個人的経験」(Peplau & Perlman, 1982) と定義される「対人的な孤独感」と、「自分自身が究極的に他者と分離していることに気付き、自分自身の人生における決定については、完全に自分が責任を負うことに気付くことによって生じる」(Peplau & Perlman, 前出) と定義される「実存的な孤独感」に分類されることが多いようである。

例えば、Moustakas (1961) は、孤独感を「孤独不安」と「実存的孤独」に分類している。そして前者に関しては、「漠然とした、かき乱すような不安としてある自己疎外、自己拒否の孤独」であり、虚無感、劣等感、攻撃性、個性を棄ててまでの依存等の原因となっていくものであると述べ、後者に関しては、「真実の体験の中において避けることのできない本当の孤独」であり、「真実の自己意識」を保持していれば、孤立は励ましとなり、より深い感受性と意識性を導き出し、創造力の源となっていくものであると述べている。

また、独自の研究により青年期の孤独感の構造が、対他的次元(人間同士の共感可能性に関する次元)と対自的次元(人間の個別性に関する次元)から成る二次元構造であることを明らかにした落合 (1989) は、青年期の孤独感は、「人と親密な関係をもとうとする志向性をもちながら、それが実現しないときに、人間同士の理解・共感は難しいと感じ、自分はひとりだと感じること。その感じの意味あいは、自分を含む人は、個別性をもつ存在であることに気付くことによって変化する」と述べている。

これらの例にも見られるように、実存的（対自的）な孤独感は、対人的な孤独感に比べて肯定的な意味あいを持つものであり、しばしば、対人的な孤独感が変化してゆくべき目標として述べられる。小此木（1979）は、対人的な孤独は大変な重荷であり、“どうしてもこの孤独を受け入れることができないで、さまざまな逃避を試みるにせよ、最終的には、自分の孤独に耐え、その孤独に居直ったところから、人生を続けるしかないことをわれわれは悟らねばならない。そしてそのような意味での孤独体験こそ、自我の自律の原体験である”と述べている。

以上のことから、青年期の孤独感の発達目標は、対人的な孤独感を実存在的な孤独感に変化させてゆくことであると言えるであろう。“実存在的な孤独”に気付くための試練のようにも思われる対人的な孤独感とは、どのようなものなのであろうか。

### 3. 対人的な孤独感の様相

孤独感（以下、「孤独感」は「対人的な孤独感」を指す）は、青年期の非行や自殺、無気力・無関心（apathy）や同一性の混乱（identity confusion）と関係があると言われている。

工藤（1986）は、中学生の孤独感の対処行動について研究した結果、孤独感の強い中学生は、孤独感の対処行動として、学校をさぼる、人の物を盗むといった逸脱行動をとりやすく、孤独感の弱い中学生は、本を読む、音楽を聴く、友達を遊びに誘う、家族と話すといった身近な気晴らしや娯楽的活動にたずさわりやすいと報告している。そして、“非行や違法行動を行う子どもたちの心的背景には、明らかに強い孤独感が存在”すると述べ、さらに、そうした逸脱行動を“孤独感の払拭の試み”として捉えている。

このように、孤独感は、青年期の問題と深く関わる感情であるが、従来の研究の多くは質問紙法のみを用いて行われているため、孤独感の強い青年が、どのような内的世界を生きているのかということについては、表層から推測されるのみであったと言ってよいであろう。Fromm-Reichmann（1959）は、孤独感は、“助けようのない絶望や不変の空虚さ”を形成すると論じているが、それらが青年の内的世界においてどのように経験されているのかを明らかにすることが出来れば、青年期の自殺などの問題について、より深い理解が得られるように思われる。そこで本研究では、質問紙に併せてTAT（Thematic Apperception Test：主題統覚検査）を施行した。投影法であるTATは、絵画刺激の捉え方や物語のつくり方の中に、個人の“内的世界の投影”が期待されるものであり、“内在化された人間関係世界の分析”（齋藤、1973）に有効な手法であると考えられている。また、山本（1992）は、TATにおいて物語をつくる過程は、“自発的な体験過程を基礎に状況の自由な設定と状況の中での自由な選択を含む過程である”ため、“日常生活状況よりも、その人らしいかわりの基本像があらわれやすい”と述べている。

質問紙で扱う要因としては、まず、自己受容（自分自身に対する満足感）を取り上げた。従来の研究（諸井、1987、1989）は、孤独感の強い人は自尊心が低いことを明らかにしている。孤独感の強い人は対人関係に満足していないだけでなく、自分自身にも満足していないという知見は、孤独感の強い青年の内的世界を理解する上で重要な手がかりとなるであろう。

ところで、先に、青年期の発達課題と孤独感の関わりについて述べたが、青年期になると誰もが一様に強い孤独感に悩まされるというわけではもちろんなく、それほど強い孤独感に悩まされない人もいる。この違いはどこから来るのであろうか。

#### 4. 孤独感と愛着体験

Winnicott, D. W. は、“おとなになってからの独りでいられる能力は、母親がいるところで独りでいる乳幼児の体験に、その源がある” (Storr, 1988) と示唆している。この見解は Bowlby (1969) が、母親と幼児の強い情愛の絆のことを愛着 (attachment) と呼び、母子の愛着関係を人格形成の核になるものとみなしたことも通じるであろう。“人生の早い時期から、自分が必要とするときには愛着を寄せる人物がまちがいに得られると思っている子どもは、安全感 (security) と心の内なる確かさの感覚を発達させる” のであり、“愛着の対象が必要なときには得られるという信頼感を発達させた子どもは、その対象から不安を持たずに離れている、という体験を増やしていくことが出来る” (Storr, 前出) のである。すなわち、“独りでいられる能力は、幼い時期を通して築き上げられてきた内的な安全感の一つの側面” なのである。

内的な安全感が築き上げられていれば、青年期に“独り”になって自らの発達課題に取り組む際にも、世界が信頼に値するという感覚が無意識のうちに存在するために、“独り”であることに対して、内的に安定した状態で向き合える (それほど強い孤独感に悩まされない) のではないだろうか。このような考えから、質問紙で扱うもう一つの要因として、幼児期の愛着体験を取り上げた。ただし、幼児期の愛着体験に関する質問紙によって測定されるものは、厳密に言えば、現在、幼児期の愛着体験をどのように見ているかという、愛着体験についての認知である。従って、得られた結果から、青年期の孤独感が幼児期の実際の愛着体験に源を持つとは言えないという問題が残る。この点については「考察」において検討する。

## II. 目 的

1. 質問紙により、青年期の対人的な孤独感と自己受容の関係について検討する。
2. 質問紙により、青年期の対人的な孤独感と幼児期の愛着体験の関係について検討する。
3. 対人的な孤独感の強い青年と弱い青年の T A T 物語を比較することにより、孤独感の強い青年の内的世界を探る。

## III. 方 法

### 〈調査対象〉

中学生：京都市立A中学校2年生；質問紙回収数243名（回収率100%）、有効回答数232名（男女各116名）；平均年齢男女各13.5歳（年齢範囲13-14）

大学生：近畿地方の国公立大学2校の学生；質問紙回収数242名（回収率75.6%）、有効回答数232名（男女各116名）；平均年齢男子19.2歳、女子19.6歳（年齢範囲18-22）

〈調査時期〉 1995年10月～12月上旬

### 〈調査用具〉

- a) T A T 図版5枚：Harvard版T A T図版から、青年期の孤独感を探るのに適していると思われる図版を5枚選択して用いた。1図版（一人の少年がバイオリンを見つめている場面）は、“絵の中の主人公が少年であることは、誰もが幼き時代を通過してきているだけに、同

一視しやすい”（山本，1992）こと，6 BM図版（若い男性に対して背を向けて年上の女性が立っている場面）は，“母子関係の心の葛藤”（山本，前出）が語られることが多く，青年期には，“母から心理的に離乳し，自立してゆくテーマが主となる”（坪内，1984）こと，11 図版（切り立つ崖を通る細い道に動物らしきものがある場面）は，非現実的であいまい性の高い図版からつくられる物語には，“語り手の心の奥底にあって象徴的に加工された危機イメージが表現されていることが多い”（坪内，前出）こと，14図版（一人の人物（シルエット）が窓に向かっていている場面）は，“語り手の一人である内面の世界がよく出てくる”（山本，前出）こと，20図版（一人の人物が街灯の下にいる場面）は，“ここで語られる人物像は，自己像であることが多い”（山本，前出）こと，などから選択した。

- b) 孤独感尺度：Russell, Peplau & Cutrona (1980) が作成した，社会的関係に対する満足感を表す項目と不満足感を表す項目各10項目，計20項目から成る改訂版 UCLA 孤独感尺度を用いた。評定は五件法。孤独感が強いほど高得点になるように1～5点で得点化。
- c) 自己受容尺度：伊藤（1991）が作成した，5領域（生き方・性格・家庭・学校・身体能力），31項目（各領域6項目で，“すべてを含んだ自分”が第31項目）から成る自己受容尺度を用いた。評定は五件法。自己受容度が高いほど高得点になるように1～5点で得点化。
- d) 母親・父親との愛着体験尺度：久保田（1992）が選択した，子供の頃の母親・父親との関係についての感情傾向・認識を表す29項目に，独自に3項目を加えた久保（1992）の研究において，“愛着尺度”として抽出された10項目を用いた。母親との愛着体験を問うものと父親との愛着体験を問うもの（内容は同じ）を作成。評定は五件法。親との愛着が安定している（愛着が強い）ほど高得点になるように1～5点で得点化。

#### 〈実施手続き〉

上記 a) から d) を含む小冊子（無記名）を授業時間に集団で実施した後回収（一部の大学生は個別に配布した後回収箱によって回収）した。TATは，原図版のコピー（縮小率65%）に教示を添え，物語を記述させる形式で実施した。なお，b) c) d) 及び d) の母親と父親の提示順は，尺度の順序効果をなくすため，被検者間でカウンターバランスした。

## IV. 結果及び考察

### 1-1. 質問紙の結果

1) 各尺度の信頼性について：各尺度ごとに尺度得点の上位25%を上位群，下位25%を下位群とし，中学生と大学生のそれぞれについてt検定によるGP分析を行ったところ，上位群と下位群の得点に有意差 ( $p < .01$ ) が認められた。 $\alpha$ 係数 (cronbach) は，孤独感尺度が中学生 .93，大学生 .91，自己受容尺度が中学生 .94，大学生 .91，母親との愛着体験尺度が中学生 .89，大学生 .89，父親との愛着体験尺度が中学生 .90，大学生 .88と十分に高かった。自己受容尺度を構成する5領域について，領域得点と下位項目得点の相関係数 (pearson) を求めたところ，中学生でも ( $r = .38 \sim .75$ ) 大学生でも ( $r = .30 \sim .76$ ) 有意な相関 ( $p < .001$ ) が見られた。

2) 孤独感と自己受容の関係について：孤独感尺度と自己受容尺度の間には有意な負の相関

(中学生  $r = -.46$ ,  $p < .001$ , 大学生  $r = -.44$ ,  $p < .001$ ) が見られた。また、孤独感尺度と自己受容尺度を構成する5領域の間にも有意な負の相関(中学生  $r = -.33 \sim -.47$ ,  $p < .001$ , 大学生  $r = -.22 \sim -.41$ ,  $p < .001$ ) が見られた。孤独感得点の高い群(上位25%, H群)と低い群(下位25%, L群)の自己受容得点及び各領域得点を比較したところ、H群の方が自己受容得点( $p < .001$ )及び各領域得点( $p < .01$ )が有意に低かった。

- 3) 孤独感と愛着体験の関係について: 孤独感尺度と母親との愛着体験尺度の間には有意な負の相関(中学生  $r = -.31$ ,  $p < .001$ , 大学生  $r = -.26$ ,  $p < .001$ ) が見られた。また、孤独感尺度と父親との愛着体験尺度の間にも有意な負の相関(中学生  $r = -.25$ ,  $p < .001$ , 大学生  $r = -.29$ ,  $p < .001$ ) が見られた。孤独感得点の高い群(H群)と低い群(L群)の母親及び父親との愛着体験得点を比較したところ、H群の方が母親との愛着体験得点( $p < .01$ )及び父親との愛着体験得点( $p < .01$ )が有意に低かった。

## 1-2. 質問紙の考察

- 1) 孤独感と自己受容の関係について: 孤独感の強い青年は、自己受容尺度で設定したすべての領域において、孤独感の弱い青年よりも自己受容度が低いという結果が得られた。このことから、「頼れる人がいない」、「自分のことをわかってくれる人がいない」といった対人的な孤独感を抱いている青年は、対人関係に満足していないのみならず、自分自身にも満足していないことが明らかになった。西平(1973)は、青年期の孤独感は、自己の内に何らかの充実した価値意識、存在の意味、歴史的使命を感じることの出来ない“空虚さ”から発生すると述べている。外的世界にも内的世界にも満足を見出せない感覚が青年期の孤独感なのである。Peplau & Perlman(1982)は、自尊心が孤独感の解消に最も重要な要因であると述べている。また、工藤・西川(1983)は、“ほとんどの人が、ある社会関係の変動を通じて孤独感を経験すると思われるが、自尊心はそれがいっそう深刻な状態に進むのを防ぐ重要な要因と考えられる”と述べている。青年期には発達課題との関係上、誰もが程度の孤独感を経験し得る。そのようなとき、自分自身に対する満足感は、孤独感に打ち克つ原動力となるのである。
- 2) 孤独感と愛着体験の関係について: 青年期の孤独感は、幼児期の愛着体験についての認知と関係があるという結果が得られた。孤独感の強い青年の認知する幼児期の母親及び父親との愛着は、孤独感の弱い青年に比べて不安定なものであった。幼児期の親子関係についての認知は、実際の経験を必ずしも反映したものではない(Kobak & Sceery, 1988)と考えられるため、孤独感の強い青年の実際の幼児期の愛着が不安定なものであったと結論づけることは出来ない。しかし、ある程度の可能性は認められよう。以下、さらに考察を進めることにする。河合(1983)は、青年期に、今まで受け容れてきた“自分を取り巻く大人——主として両親——の世界観”が破壊され、新しい自分なりの世界観が形成されてくることに関して、“今まで安定していたものが揺すぶられ、破壊されて新しいものができあがってくる。このときに、既成のもの否定的な面が拡大して意識されやすいのである”と述べている。すなわち、青年期には、“両親の否定的な面”が“映画のクローズ・アップのように拡大されて”見えてくるのである。河合(前出)はさらに、“子どもは現実の親の姿を見ているの

ではなく、自分の心の中の親のイメージを見ているといった方がいいであろう”と述べている。孤独感の強い青年に見られた、幼児期の両親との愛着体験についての否定的なイメージは、このような、青年期に生じてくる親についての否定的なイメージと関連を持つのではないだろうか。Erikson (1950) は、自我同一性の形成過程において、“連続性と斉一性の新しい観念を追求”するためには、“全く善意の人々にわざわざ敵としての役割を演じてもらわなくてはならないのである”と述べている。孤独感の強い青年は、無意識に、この“敵としての役割”を両親に与え、そのリアリティーを深めるために、過去（幼児期）の両親との関係までも否定的に捉えているように思われる。

2-1. TATの結果

孤独感得点の上位19%を孤独感の強い群（以下H群）、下位19%を孤独感の弱い群（以下L群）として抽出（各44名、計176名）し、分析（ $\chi^2$ 検定）の対象とした。各図版の物語は、筆者によりいくつかのテーマに分類された。全体の20%の物語について、筆者と他の一名で独立に評定を行ったところ、83.9%の一致を見たので、残りは筆者のみで行った。

- 1) 1図版：少年が何らかの理由で「悩んでいる」という物語について、物語の結末において悩みが「解決される」ものと「解決されない」ものに分類したところ、前者はL群に（ $p < .01$ ）、後者はH群に（ $p < .01$ ）多く見られた。例えば、「ヴァイオリンを壊してしまった悩み」の物語の場合、「どうしよう」と困っている段階にあるものはH群に多く、「親に正直に話すと叱られなかった」というような形で悩みの解決を迎えるものはL群に多かった。また、

表1-1 1図版の物語

		中学生						大学生					
		H群			L群			H群			L群		
		男 32	女 12	計 44	男 17	女 27	計 44	男 22	女 22	計 44	男 20	女 24	計 44
ヴァイオリンをうまく弾けない悩み	解決	1	0	1	0	3	3	1	2	3	0	3	3
	未解決	5	4	9	1	2	3	1	3	4	1	1	2
ヴァイオリンを壊してしまった悩み	解決	1	0	1	2	3	5	1	0	1	2	1	3
	未解決	8	0	8	3	3	6	4	2	6	1	0	1
身体的故障のため弾けない悩み	解決	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	未解決	2	2	4	1	6	7	0	0	0	0	0	0
その他の悩み	解決	1	2	3	3	0	3	1	3	4	3	7	10
	未解決	5	1	6	0	7	7	11	9	20	7	6	13
形見のヴァイオリン		1	0	1	1	2	3	0	2	2	1	3	4
空想・思考		6	3	9	3	1	4	3	1	4	5	3	8
無回答		2	0	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0

表1-2 1図版の物語／孤独感H群とL群の比較

		中学生			大学生			中学生と大学生		
		H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定
		42	42		44	44		86	86	
悩 み	解決	5	12	+	8	16	+	13	28	**
	未解決	27	23	n.s.	30	16	**	57	39	**
形見のヴァイオリン		1	3		2	4		3	7	n.s.
空想・思考		9	4	n.s.	4	8	n.s.	13	12	n.s.

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$



- H群とL群の比較ではないが、「事故のため指が動かない」、「耳が聞こえない」などのように、「身体的故障のためヴァイオリンを弾くことが出来ない」悩みは中学生にのみ見られた。
- 2) 6 BM図版：「子どもの事故を心配している夫婦」、「父の命日を共に過ごす母と息子」などのように、図版中の男性と女性何らかの「悲しみや心配を共有」している物語はL群に多く ( $p < .001$ ) 見られた。これに対し、「老婦人の食事に毒を盛り、効き目が現れるのを待つ男」、「分かり合えず離婚する夫婦」などのように、二人が「対立及び拒絶」の関係にある物語はH群に多く ( $p < .01$ ) 見られた。また、「罪を犯したことを告げる息子」、「母にガンを宣告する息子」などのように、「一方が他方に良くない知らせを伝える」のみで、悲しみや心配が共有されていない物語もH群に多く ( $p < .01$ ) 見られた。さらに、人数は少ないが、母が「痴呆などのため交流が持てない」とする物語もH群に多く見られた。なお、「その他」に分類された物語については、L群では「はじめて好きな女性の家を訪ねた男性」、「悩みがあり、わらにもすがる思いでおばあさんに話しかける」などのように、人と人との交流の物語が主であったのに対し、H群では「嵐で外に出られない」、「屋敷ごと燃える」、「原爆が落ちて消える」などのように、外界の脅威や自分を含む世界の崩壊の物語 (L群では見られない) が5名に見られた。
- 3) 11図版：「悪魔との対決」、「迷い込み」、「越えなければならない険しい峠」などのように、何らかの「危機あるいは厳しさ」が語られる物語について、危機や厳しさが「克服」されるものと、「通過途中」にあるものと、「死」んでしまうものに分類したところ、「克服」はL群に ( $p < .001$ )、「通過途中」( $p < .01$ ) と「死」( $p < .01$ ) はH群に多く見られた。また、「癒しの力を持つ神秘の滝」、「橋に向かって歩いてても全然近付けない。それは大人になるまで通れない橋であった」、「動物の楽園。人間達が入ってこないようにと動物達が祈りを捧げ

表2 6 BM図版の物語／孤独感H群とL群の比較

	中学生			大学生			中学生と大学生		
	H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定
息子の旅立ち (結婚や仕事のため)	8	10	n.s.	8	8	n.s.	16	18	n.s.
悲しみや心配を共有	6	18	**	10	22	**	16	40	***
対立・拒絶	12	6	n.s.	8	1		20	7	**
良くない知らせの伝達	4	1		8	0		12	1	**
痴呆などのため交流不能	3	0		3	1		6	1	
その他	10	7		7	12		17	19	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$

表3 11図版の物語／孤独感H群とL群の比較

		中学生			大学生			中学生と大学生		
		H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定	H	L	$\chi^2$ 検定
危機・厳しさ	克服	2	10	*	0	8		2	18	***
	通過途中	17	11	n.s.	24	13	*	41	24	**
	死	9	3	+	6	1		15	4	**
神聖な場所／動物の住処／思い出		1	8		4	12	*	5	20	**
大自然に対する親和感		5	4		4	2		9	6	n.s.
その他		2	1		1	2		3	3	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$

原田：青年期の孤独感

ている」,「思い出の場所。昔と何も変わっていないが、もうあの頃の私には戻れない」というような物語を「神聖な場所／動物の住処／思い出」というテーマの下にまとめたところ、このテーマはL群に多く ( $p < .01$ ) 見られた。

4) 14図版:「病気で外に出られない」、「自由がない」、「孤独で寂しい」といった「内閉や束縛や悩み」の物語について、それらが「解決される」ものと「解決されない」ものに分類したところ、前者はL群に ( $p < .001$ ), 後者はH群に ( $p < .01$ ) 多く見られた。また、「飛び降り自殺」、「向かい側のビルの住人がいきなり窓から身を乗り出して飛び降りた」などのように、死がテーマとなる物語もH群に多く ( $p < .001$ ) 見られた。「銀行強盗・泥棒」のテーマは、人数には差が見られなかったが、内容には差が見られ、L群では「貧しい人のためにパンを盗む」などのように、弱者に優しい怪盗が主人公であった。「その他」に分類された物語については、L群中学生では「自殺をするシーンの撮影」、「身体が空に舞い上がり、空から落ちるが夢だった」、L群大学生では「光の世界と影の世界」、「ジキルとハイド」などが特徴的であった。

5) 20図版:「父と喧嘩して家を飛び出したが、行くところがない」、「戦争で妻も子供も家もすべてを失った」、「かくれんぼをしていて下水道に隠れたが、出口が分からなくなった」といった「悩み」の物語について、悩みが「解決される」ものと、「解決されない」ものと、解決されないまま「死」んでしまうものに分類したところ、「解決」はL群に多く ( $p < .05$ ) 見られた。また、有意差は得られなかったが、「死」はH群に多く見られる傾向 ( $p < .105$ ) があつた。L群に多く見られた「解決」の物語とは、「家を飛び出したことを心配した両親が家の前で待っていてくれた」、「生きる希望を失い、自分も死んでしまおうと考えた時、頑張って生きなさいという声(亡くなった妻や母の声)が聞こえてきた」というようなものである。これに対し、H群に多く見られた「死」の物語とは、「腹立ちまぎれに歩行者を刺し、

表4 14図版の物語／孤独感H群とL群の比較

		中学生			大学生			中学生と大学生		
		H	L	$\chi^2$	H	L	$\chi^2$	H	L	$\chi^2$
		41	41	検定	44	44	検定	85	85	検定
内閉・束縛・悩み	解決	5	13	*	6	22	***	11	35	***
	未解決	11	7	n.s.	15	2	***	26	9	**
死		8	2	*	7	0		15	2	***
壮快感・夢想		6	8	n.s.	10	14	n.s.	16	22	n.s.
銀行強盗・泥棒		4	5		1	2		5	7	n.s.
その他		7	6		5	4		12	10	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表5 20図版の物語／孤独感H群とL群の比較

		中学生			大学生			中学生と大学生		
		H	L	$\chi^2$	H	L	$\chi^2$	H	L	$\chi^2$
		40	42	検定	43	44	検定	83	86	検定
悩んでいる	解決	1	5		6	13	+	7	18	*
	未解決	12	13	n.s.	21	13	n.s.	33	26	n.s.
	死	5	3		3	0		8	3	$p < .105$
人を待っている		9	8	n.s.	8	9	n.s.	17	17	n.s.
その他		13	13		5	9		18	22	

\* $p < .05$ , + $p < .10$

自分も刺して死んだ」,「彼のへまから仲間が二人捕らえられ、彼も追われる身となった。それだけでなく、ギャングの組織内でも彼を消そうとする動きがあらわれた。通りの向こうで一丁のけん銃が彼に向けられ、次の瞬間弾丸が発射された」というようなものである。

## 2-2. TATの考察

- 1) 1図版:「ヴァイオリンをうまく弾けない」,「ヴァイオリンを壊してしまった」,「小さい頃から親の言うままにヴァイオリンを弾いてきたが、自分にとってヴァイオリンとは何なのかを考えはじめて分からなくなった」などのように、少年が何らかの理由で悩んでいるとする物語が多く見られた。鈴木(1991)は,“ヴァイオリンを買い与えるのも習わせるのもふつうは親である。それゆえヴァイオリンは単なるものではなく、親の子に対する愛情や教育的関心を象徴するものである”と述べている。すなわち、ヴァイオリンにまつわる悩みの背後には親との愛情関係にまつわる悩みが潜んでいるのである。孤独感の強い群(以下H群)は、弱い群(以下L群)に比べて悩みが解決される物語が少なく、悩みが未解決である物語が多かった。このことから、H群の内的世界には、親との愛情関係にまつわる悩みが解決の見えない形で存在することが推測される。H群とL群の比較ではないが、「身体的故障のためヴァイオリンを弾くことが出来ない」悩みが中学生にのみ見られたことについても考察を試みよう。Bellak(1954)は,“少年を「けがをしている」と表現した場合、語り手の歪んだ body image をそこに見ることが出来る”と述べている。中学時代は身体の急激かつ大きな変化を経験する思春期にあたるため、安定した身体像を持つことが困難なのであろう。
- 2) 6 BM図版:「子どもの事故」,「父の死」などのように二人が悲しみや心配を共有している物語はL群に多く見られた。これに対し、「男性が個人的な恨みから婦人を殺す」のように二人が対立・拒絶の関係にある物語や、一方が他方に良くない知らせを伝えるのみで、悲しみや心配が共有されない物語や、痴呆などのため交流が持てないとする物語がH群に多く見られた。このことから、H群の内的世界に住む他者(内在化された他者)は、悲しみや心配を共有するような存在ではなく、それどころか、自分の存在を脅かすような存在であることが推測される。自分の存在を守るためには、その他者と戦い、時には殺害さえ行わなければならないのである。H群のみに見られた、「原爆が落ちて消える」に代表される、自分を含む世界の崩壊の物語は、その対立関係を清算する、唯一の解決策(すべてが消えるという点で)のイメージなのではないだろうか。自らが消え、世界も消えるというこのイメージは、「自殺」のイメージにつながるものであると思われる。
- 3) 11図版:山本(1992)は11図版について,“あいまい性が高く、なおかつ崖の切りたつ、奥深いところに吸いこまれる感じの場面は、未知なもの、不安なもの、何がでてくるのかわからないこわさを感じさせる”と述べている。この指摘通り、本研究でも、何らかの危機や厳しさがテーマとなる物語が多く見られた。この危機や厳しさが、「冬山で、今にも死にそうなところを歩いている。足が動かなくなったが、もう一人いた人におんぶをして運んでもらった。山小屋で温かいスープを飲み、無事助かった」,「誤って足を滑らせ、崖から転落してしまった。主人がどこにいるかしっかり確認する愛犬。愛犬は山道を行き、他のハイカーをなんとか連れてくることに成功する。主人は九死に一生を得た」というような形で克服さ

れる物語はL群に多く、まだ通過途中にある物語や、「崖崩れが起きて死ぬ」のように死んでしまう物語はH群に多く見られた。このことから、H群の内的世界には、危機に直面した時にその危機から救い出してくれるような対象（他者・動物）が存在しないこと、さらに危機そのものが、自然災害（天変地異）のように、どうすることもできないもの（自分を含む世界の崩壊）として生じていることなどが推測される。「神秘の滝」、「人のめったに来ない小道。旅人がここを通ったのは三日前。それ以降うさぎやりすが来るくらいの静かな森の中。そこに一人の妖精があらわれる。さみしいけれどなんて平和なところなんだろうと感動する。ここはこれからずっとこのままでありつづけるようにと祈る。そして実際そうなるのである」、「動物の楽園。人間達が入ってこないようにと動物達が祈りを捧げている」、「思い出の場所」などのように、「守るべき場所」をテーマとする物語はL群に多く、H群にはあまり見られなかった。この「守るべき場所」であるが、筆者には、子ども時代の世界が象徴的に表されたものであるように思えてならない。L群は子ども時代の世界を内的世界の中に、「守るべき場所」として位置付けることによって、大人の世界に入って行くのではないだろうか。これに対し、H群ではそのような位置付けがなされていない。河合（1987）は、子どもの自殺に関して、「実際、子どもたちをよく観察していると、「性」の衝動が動きはじめ、それと取り組むことによって大きい変化が生じる以前に、子どもとしての「完成」に達するように思われるときがある。子どもとしては、高い完成感と、早晩それが壊される、あるいは汚されるだろうという予感が生じてきて、その完成を守るために自殺をするなどということもあるのではないかとと思われる」と述べている。この子どもとしての完成を守る手段としての自殺は、それ以外に子どもとしての完成を守る手段を持たないH群（L群は内的世界の中に子どもとしての完成を守る場所を持っているため、自殺によらなくてもそれを守ることが出来る）において、起こり得るものであるように思われる。

- 4) 14図版：「毎日毎日仕事ばかりしていて、自分の生きる意味や目的を見失ってしまった。何もかも分からなくなり、窓を見ると、外には、青い空、白い雲、さんさんと輝く太陽がある。思わず窓を開け、鳥たちのさえずりを聞く。世の中にあるすばらしい自然を思い出し、これからはもっと、心にゆとりを持って働こうと決心する」のように、内閉や束縛や悩みが解決される物語はL群に多く見られ、「広い屋敷の一室から何らかの理由によって出ることの出来ない青年。外へ出たいという欲求を秘めながらそれでも外へ踏み出すことが出来ず、今も窓から外をながめることしか出来ない」のように悩みが未解決である物語はH群に多く見られた。このことから、H群の内的世界には、自分と世界の関わりにまつわる悩みが解決の見えない形で存在することが推測される。「飛び降り自殺」のように、死がテーマとなる物語もH群に多く見られた。このことは、H群の一人でいる時の存在の不安定さを示しているように思われる。この存在の不安定さについては、「彼は外に出ようとドアを開けた。彼は気付いた。彼は膝から下が無かった。窓からは光が差し込んでいたが、何も照らさなかった。その部屋はブラックホールだった。光は吸い込まれたまま消えた。彼も無限に小さくなり消えた」という物語が、そのイメージを与えてくれよう。「銀行強盗・泥棒」がテーマとなる物語は、L群では「貧しい人たちのために」のように、犯罪を行う理由や背景が述べられているものが多かったのに対し、H群ではその理由や背景を述べたものはほとんど見られ

なかった。H群で特徴的に見られた「理由無き犯罪」のイメージは、青年期の「非行」のイメージに重なるように思われる。L群中学生のみに見られた物語は「自殺するシーンの撮影」、「空から落ちるが夢だった」というものである。L群でも「死」が体験されるが、H群とは異なり、この世にまた戻ってくる「仮の死」という形で体験されるのである。L群中学生は内的世界の中で、死を決定的なものとしてではなく、「仮の死」という形にやわらげて体験することにより、子ども時代の終わり（子どもである自分の死）をうまく迎えているように思われる。また、L群大学生のみに見られた物語は「光の世界と影の世界」、「ジキルとハイド」などをテーマとする物語である。L群大学生は自分の内にある二面性を内的世界の中に、「光の世界と影の世界」のように対等なものとして位置付け、共存させることによって、内的な安定をうまく保っているように思われる。

- 5) 20図版：20図版はT A Tの最終図版、映画で言えば「ラスト・シーン」（山本，1992）である。山本（前出）は、このラスト・シーンでは、“エピソードの連続体であるT A T物語のシリーズを通しての人生航路の現在から未来への姿勢”が示されると述べている。そのような最終図版において、「行くところがない」、「生きる希望を失った」などのような「悩み」が解決される物語はL群に多く、解決されないまま死んでしまう物語はややH群に多い傾向があった。L群に多く見られた解決の物語の一つに、「生きる希望を失い、自分も死んでしまおうと考えた時、頑張らなくていいという声（亡くなった妻や母の声）が聞こえてきた」というようなものがあるが、これは、今日の臨死体験（near death experience）についての研究において報告されている、瀕死状態の時に、すでに亡くなったゆかりの人物と出会ったり、不思議な声を聞いたりする（Becker, 1992）体験に酷似している点で、注目に値するであろう。漠然とした言い方になってしまうが、L群の内的世界には、死者の住む領域（超越の世界）のようなものも存在するのではないかとと思われる。L群は絶望状態にあっても、この内在化された超越の世界と関わりを持つことによって、内的な安定を保つことが出来るのである。これに対し、そのような世界を持たないH群は絶望状態を“独り”で迎えるため、絶望が解決されにくく、「死」へとつながりやすいのである。ところで、最終図版で語られる死は何を意味するのであろうか。Hillman (1964) は、“死への衝動は、必ずしも反生命的な動きと考える必要はない。それは絶対的存在との出会いに対する要求、死の体験を通じて得る、より完全な生に対する要求であるかもしれない”と述べている。すなわち、“自殺とは心の急激な変容への、衝動なのである”（山中，1985）。従って、“未来への姿勢”が示されるべき最終図版で語られる死には、「死による再生」の意味合いが含まれている可能性が大きい。しかし、H群の「死」の物語から「死による再生」のニュアンスを読み取ることは困難である。H群はまだ、「絶望による死」のイメージに圧倒されている段階にあり、そのイメージを十分に深める、あるいは何らかの形で昇華させることによって得られるであろう「再生」のイメージには至っていないと考えた方がよいであろう。

#### 引用文献

- Becker, C. 1992 死の体験 — 臨死現象の探求 — 法蔵館  
 Bellak, L. 1954 *The Thematic Apperception Test and Children's Apperception Test in Clinical*

- cal Use. New York: Grune & Stratton
- Bowlby, J. M. 1969 黒田三郎他訳 母子関係の理論 I — 愛着行動 — 岩崎学術出版 1976
- Erikson, E. H. 1950 仁科弥生訳 幼児期と社会 I みすず書房 1977
- Erikson, E. H. 1959 小此木啓吾訳編 自我同一性 誠信書房 1973
- Fromm-Reichmann, F. 1959 Loneliness. *Psychiatry*, 22, 1-15.
- Hillman, J. 1964 樋口和彦・武田憲道訳 自殺と魂 創元社 1982
- 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的变化 — 2次元から見た自己受容発達プロセス — 発達心理学研究, 2, 2, 70-77.
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 — その変容と多様化 — 誠信書房
- 河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ — 青年期の問題 — 岩波書店
- 河合隼雄 1985 子どもとファンタジー 河合隼雄編 子どもと生きる 創元社, 135-153.
- 河合隼雄 1987 子どもの宇宙 岩波書店
- Kobak, R. R. & Sceery, A. 1988 Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation, & representation of self and others. *Child development*, 59, 135-146.
- 久保 恵 1992 対人恐怖的心性についての一考察 — 幼児期の親子関係との関わりから — 京都大学教育学部教育心理学科卒業論文
- 久保田まり 1992 親についての認知と対人魅力性との関連 — 内的ワーキングモデルについての基礎的研究 — 日本心理学会第56回発表論文集, 47.
- 工藤 力 1986 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, 57, 5, 293-299.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) — 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 — 実験社会心理学研究, 22, 2, 99-108.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26, 2, 151-161.
- 諸井克英 1989 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, 29, 2, 141-151.
- Moustakas, C. E. 1961 飯鉢和子訳 孤独 — 体験からの自己発見の研究 — 岩崎学術出版 1972
- 西平直喜 1973 青年心理学 現代心理学叢書第7巻 共立出版
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- 小此木啓吾 1979 青年期の孤独 青年心理, 12, 16-28.
- Peplau, L. A. & Perlman, D. (Eds) 1982 加藤義明監訳 孤独感の心理学 誠信書房 1988
- Russell, D., Peplau, L. A. & Cutrona, C. E. 1980 The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity Evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 3, 472-480.
- 齋藤久美子 1973 T A T 倉石精一編 臨床心理学実習 — 心理検査法と治療法 — 誠信書房, 第6章, 2節.
- Storr, A. 1988 森 省二・吉野 要監訳 孤独 — 自己への回帰 — 創元社 1994
- 鈴木睦夫 1991 T A Tへの反応分類を中心とした接近法 — 図版ごとの反応のカテゴリー化とその意味づけ — 心理臨床学研究, 8, 3, 17-28.
- 坪内順子 1984 T A Tアナリシス — 生きた人格診断 — 垣内出版
- 山本和郎 1992 心理検査T A Tかわり分析 — ゆたかな人間理解の方法 — 東京大学出版会
- 山中康裕 1985 「症状」の象徴的な意味について 河合隼雄編 子どもと生きる 創元社, 43-61.
- 慶澤 華 1996 青年期の孤独感 — 質問紙とT A Tを用いて — 京都大学教育学部教育心理学科卒業論文

(博士後期課程1回生, 心理臨床学講座)